

日本遺産北前船 ゆかりの飾磨津を巡る ウォーキングマップ



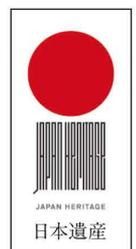
～一獲千金の夢物語「北前船」～

姫路藩の外港の一つとして、姫路市の野田川河口に開けた飾磨津は、『万葉集』にも記される古くからの海運の要衝で、江戸時代になると瀬戸内海の往来船や北前船の寄港地として発展しました。飾磨街道と浜街道の道沿いに、往時の繁栄を物語る回船問屋の屋敷や土蔵のある街並みが続きます。古着商の馬場家、回船問屋の中島家には商取引に係わる文書や酒田の本間家との書簡が伝えられ、多くの取引が行われたことを示すとともに、遠く離れた庄内地方とのつながりを今に伝えています。



～日本遺産とは～

日本遺産とは地域の歴史的魅力や特色を通じてわが国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産 (Japan Heritage)」として国 (文化庁) が認定するものです。



日本遺産北前船ゆかりの飾磨津を巡る

いなお

① 稲生社

境内の井筒・手水鉢は、文久2年(1862)に御船手所(御船役所)が寄進したもの。手水鉢背面には、江戸末期の小船頭等を務めた「下里平太」の名が刻まれている。



② 姫路藩御船役所

慶長年間、池田輝政によって創設された水軍の基地として、三左衛門堀を掘った土砂で造成されたとされ、全体の規模は、南北194間、東西88間余あったという。藩の船役所が置かれ、海事業務を取り扱い、約200名、60隻の船舶を有していたという。御船手組は、藩主が国替えになっても従わず、そのまま新しい藩主に仕える城付であった。野田川沿いに昭和10年に建てられた「史蹟舊姫路藩御船役所之址」の石柱がある。



③ 東堀船繋ぎ石

東堀は、飾磨津の主要船着場としての役割を担っていた。その名残の一つがこの船繋ぎ石である。かつては、等間隔で相当な数並んでいたという。

④ 恵美酒宮天満神社

もと漁業神として戎の神を祭り、後に天満神(菅原道真)を勧請して合祀。社殿前の石灯籠は、元禄11年(1698)のもので京都の吉文字屋孫作の寄進。狛犬は凝灰岩製で、天保15年(1844)に広島尾道石工である嶋屋勘十郎の作。牛は、神意を伝える使いで、石製の牛像には、弘化3年(1846)の銘がある。拝殿脇の力石は、大浜岩吉が天保13年(1842)に奉納したもので、浜の宮天満宮にも同形のものがある。拝殿内には、文久3年(1863)に建造した西洋型帆船「神護丸」の絵馬(姫路市指定文化財)が慶長3年(1867)に奉納されている。



ごこう

⑤ 御幸橋・飾磨御蔵跡石碑

平安時代末の後白河法皇(あるいは平安時代中頃の花山法皇)が書写山円教寺に御幸する時に通ったことによりこの名がついたと言われる。姫路藩の米蔵7箇所の一つ飾磨津御蔵があった浜国沿いに石碑がたっている。



⑥ 飾磨津物揚場跡

明治政府は、近代化を先導する模範鉱山として、生野鉱山を初の官営とし、西洋技術の導入を図った。明治9年、ここで用いられる大型機械や採掘に必要な諸物資などを効率的に運ぶため、貨物港の飾磨津物揚場と生野まで約49kmの馬車道を整備した。現在、物揚場跡は、民間会社の所有となっているが、当時の物揚場煉瓦倉庫の一部が残っている。日本遺産「播但貫く、銀の馬車道鉱山の道」の構成文化財。



なかしま

⑦ 中島家住宅

江戸時代から大正頃を中心に廻船業を営んでいた中島家の住宅。北側には、浜手の主要街道である浜街道が東西方向に走る。間口は東西約8間、南北約18間、主屋を街道に面して北に配し、南に2棟の土蔵を配している。主屋はつし2階、間口6間、奥行6間半、大型の町家で、2階に小さな虫籠窓を開け、1階は出格子を設けるなど、伝統的な形式を保っている。建築年代は明確でないものの、幕末頃と想定されている。平成8年、姫路市都市景観重要建築物等に指定。日本遺産北前船の構成文化財。



⑧ 浜の宮天満宮

菅原道真を祭神とし、境内には「えべっさん」も祀られている。南面する拝殿の正面南東側に砂岩製の神牛がある。花崗岩の台石には、明治11年5月、越前国の右近権左衛門、中村三之丞、加賀国の大家七兵衛、広海二三郎、角谷甚太郎の北前船船主と思われる5名が願主となり、地元の岡上彦一、松田喜十郎、藤田栄治郎、浜田藤次郎の5名が幹旋人となったことが記されている。石工は、大坂の須山涼兵衛。日本遺産北前船の構成文化財。



⑨ 岡上家・魚屋堀

岡上家は干鯛(ほしか)問屋で、町役で大年寄も務めるなどの有力者であった。代々彦太夫を名乗り、屋号を魚屋とした。これに因んで門前の堀は魚屋堀と呼ばれた。昭和6年、臨海道路整備のため、大半が埋められた。明治維新の魁ともなった文久3年10月の生野の変。尊王攘夷派の平野国臣らは、長州から生野に向かうため、ここから飾磨に上陸したと伝わる。



たんぼ

⑩ 藤田翁顕彰碑・湛保

姫路の外港であった飾磨津河口は、浅瀬であったため頻繁な浚渫にもかかわらず、大型船の入港が難しかった。このため、弘化3年(1846)、姫路藩の援助のもと干鯛(ほしか)問屋の藤田佑右衛門が中心となって飾磨津の入り口に湛保(たんぼ 船繋場)を築造した。堤の高さ3間、東西60間、南北83間の規模で、水深は、満潮時2間、干潮時でも1間あったという。現在も、コンクリートの防潮施設が付加されているものの、現役の船繋場として使われ、雁木(がんぎ)などがほぼ当時のまま残っている。湛保東側の堤上には、昭和10年に藤田佑右衛門の顕彰碑が建てられている。日本遺産北前船の構成文化財。



⑪ みなとミュージアム

姫路港の活性化を目指し、「海」・「みなと」・「銀の馬車道」をテーマとして、平成25年姫路ポートセンター2階にオープンしたミュージアム。

